巻　頭　言

最近，数学の学術雑誌が話題にのぼることが多い．購入価格の急沸に関したことから，雑誌の電子化，あるいは最近の IMU-ICIAM-IMS からの報告書 "Citation Statistics"のように学術雑誌の評価に関することまでさまざまな観点から話題となっている．学術雑誌には，大学や学会などの非営利団体が出版しているものと出版社が出版しているものとがある．Compositio Mathematica のように，Kluwer から出版されていたものが，非営利団体の出版に移ったものもある（これは，不正確な言い方かもしれない）．出版社から出版される学術雑誌も，その数がますます増えてきているようである．

私もいくつかの学術雑誌の Editor をしているが，その編集方法は，雑誌によってまちまちのようである．私が Editor をしている学術雑誌の一つ Journal of Algebra は Academic Press から出版されていたが，現在 Elsevier から出版されている．20 人を越える Editor がいるが，それぞれの Editor が担当の論文に責任をもち，個々の論文に対して，レフェリーの選定から始まって，レフェリーへの依頼，掲載，非掲載の決定に至るまで行っている．

Duke Mathematical Journal では，Managing Editor が，他の Editors の助言をかりながら，全体の編集を行っていた．Publications of Research Institute for Mathematical Sciences では，Editor は数理解析研究所教授からなっている．投稿された論文は分担した Editor が扱い，掲載，非掲載の決定は編集委員会がおこなっている．このように，雑誌によってその編集方法は様々である．

研究の発表形態の一つとして, on-line の preprint が数学においても一般的になりつつある．たとえば，Arxiv のような on-line の preprint（e-print）では，投稿は殆んど自由で，これが on-line で公開されている．e-print の役割はますます大きくなりつつあるが, このような e-print と学術雑誌のもっとも大きな違いは，学術雑誌の論文がレフェリー付であることであろう．また，Mathematical Reviews のような 2 次資料では，学術雑誌掲載の論文は扱われているが e-print は扱われないこともあげられるかもしれない．

このような観点からも，学術雑誌の存立にとってレフェリーの存在は重要である．

私自身も，最近は多忙になりレフェリー依頼を断らざるを得ないことが多いが，それでも年に何件かはレフェリーをしている．自分の分野の論文で既に目を通しているもののレフェリーを頼まれることもあるし，面白い論文のレフェリーにあたることもある．このようなときはレフェリーも楽であるが，読みにくい論文などにあたるとレフェリーの仕事はたいへんである．

通常，レフェリーは無報酬で，しかもレフェリーの名前は匿名にされ，どこにも現れない．たまに，論文の著者が，匿名のレフェリーに論文中で感謝しているのを見掛けることもあるが．

このように，レフェリーを引き受ける側からすれば，レフェリーは報われることの最も少ない仕事といえるであろう．それにもかかわらず，私がレフェリーをなるべく引き受けるようにしてきたのは，自分の研究成果を学術雑誌に発表するたびにレフェリーのお世話になってきたことへの恩返しといえるかもしれない．

多くの研究者の無償の努力によって学術雑誌が支えられている．

柏原　正樹（京都大学数理解析研究所）